研究

周防国須々万沼城合戦についての一考察

会員　小林省三

はじめに

天文二四年（一五五五）一〇月朔日、厳島の合戦で陶晴賢を倒した毛利軍は、直ちに大内義長と陶氏の残存勢力のある防長両国に侵攻し、一〇月七日には岩国の永興寺に陣を移した。

その後、毛利軍による防長両国への侵攻は続けられたが、須々万沼城が落城したのは一年五ケ月後の弘治三年（一五五七）三月三日であった。このように毛利軍は須々万沼城を攻略するまでに長年月を要した。

村田修三氏は、当時の毛利氏について、「毛利氏は安芸国の国人領主として成長し、一族一揆の段階から、応仁文明乱を契機に庶家に対する惣領の決定的優位と領国規模の形成を進めて、天文末弘治に大内氏の旧領防長二国を併合して戦国大名化した。その過程で重視すべきことは、国人段階における守護との関係と防長征服時の農村の抵抗である」と述べている。[1]

本稿は、これらの見解を参考にして、毛利軍が防長両国侵攻開始以来、須々万沼城が落城するまでに一年余にわたる長年月を必要とした要因について、考察を試みようとするものである。

一、明応～弘治期の毛利氏

当時、中国地方では、尼子氏・大内氏・毛利氏を中心とする戦いがくりひろげられつつあった。

尼子氏は、出雲国の守護代の家柄でありながら、経久が文明一八年（一四八六）には守護家を排して、戦国大名としての第一歩をふみだし、めぐまれた鉄資源を背景としながら急速に山陰の大勢力となっていた。

また、大内氏は、全国屈指の大守護大名であった。

これに対して毛利氏は、安芸国高田の吉田荘に拠る一国人から順調に領主的成長を遂げ、元就の兄にあたる興元のころには、安芸国ではもっとも有力な国人領主となっていた。

この国人領主段階における毛利氏の軍事力編成について、松浦義則氏は、国人領主としての毛利氏の特質として、毛利氏と個々の家臣との間に個別的・歴史的な関係が存在し、それによって知行制とそれにもとづく役負担が個別的・歴史的な差を含み、統一的な体系を欠いていることを指摘されている。(2)

国人領主段階における毛利氏の軍事力編成についての、このような指摘は妥当であると考える。

国人領主段階における毛利氏においては、その軍役と所領の照応の観念は、毛利氏と個々の家臣との間の関係においてのみ現実化したようであり、東国の戦国大名のように、全家臣に適用できる数量的・統一的基準の設定と、直ちに結びつくものではなかった。

それ故に、国人領主毛利氏の軍事力動員の実現を保証するものとしては、伝統的秩序とそれを支える毛利氏と個々の家臣との個人的・人格的関係であった。

以上に述べたように、国人領主段階の毛利氏においては、軍事力強化を指向する政策の貫徹を妨げている家臣団の領主権力に対する一種の自立性が存在した。

その自立性とは、主従関係の双務的性格と、主従間の個別的・歴史的な関係とそれにもとづく身分的な編成としてとらえられるものである。

毛利氏は、戦国大名化した天正年間に至っても、このような国人領主的なありかたから完全には脱却しえなかったといわれる。

このような国人領主段階における毛利氏の軍事力編成の特質は、天文二四年（一五五五）に始まる防長両

国への侵攻開始後、須々万沼城落城まで一年五ケ月の長年月を必要とした要因の一つと考えられる。

二、地侍と農民の抵抗

天文二四年（一五五五）一〇月より弘治二年（一五五六）四月にかけて、防州東部で陶方に組した地侍と農民で構成された地下一揆軍が、活発なゲリラ戦を展開し、毛利軍を悩ました。この状況については、『新裁軍記』（拾弐抜粋）に収められている次の史料で確認できる。

（史料1）

天文二十四

十月

是月（日本考）攻防州倉掛山（政所都）城主杉（治部太輔）隆泰敗死

廿八日発兵討防州伊賀地（政所都）賊

伊賀地ノ一揆蜂起シケレハ、公諸将ヲ遣シテ誅滅セシム

弘治二年

二月

弘治二年二月初（日本考）遣諸将討防州山代（政所都）賊徒（上）

八日撃賊徒于防州屋代（政所都）及中須（都濃郡）

日（未考）伐賊徒于祢笠（日本考）

日（未考）破賊徒于山代成君寺（政所都）

三月

三月十一日撃山代（同上）賊徒

十三日与賊徒戦于中須（都濃郡）

十四日戦于三瀬川（都濃郡未考）

四月

四月十八日戦于鷲頭（都濃郡未考）

十九日戦于下松（都濃郡）

史料（1）からわかるように、天文二四年（一五五五）より弘治二年（一五五六）にかけて、陶方に組した地下一揆軍は、毛利軍を悩ました。天文二四年一〇月には、防州倉掛山の合戦や伊賀地の合戦が行われた。また、弘治二年に入ると二月には山代の合戦、屋代・中須の合戦、祢笠の合戦、山代成君寺の合戦が行われ、

三月には、山代、中須、三瀬川、玖珂で合戦が行われた。

この地下一揆軍との合戦は、元来大会戦向きに編成された足軽では、十分に対応できないようなゲリラ戦であった。そこでは、毛利対陶の戦いが、毛利対土豪一揆となり、さらに毛利対農民一揆に深化したのである。

史料（1）の毛利対地下一揆軍の合戦に照合する内容のものとして『大内氏実録』（巻二十八、列伝第十四）に、次のように記されている。

（史料2）

（前略）（天文二十四年十月）廿八日、毛利兵伊賀地を撃つ。（古文書・今の伊陸村なり）十一月十四日、杉隆泰、先是毛利氏に内応す。ことあらわれて本日毛利氏の攻る所となり、城陥りて死す。（同上）二年二月八日、玖珂郡山代地、先是毛利氏の略する所となりしが、八箇村の者蜂起して毛利兵と本郷及び都濃郡中須等に戦ふ。（同上）毛利兵来り熊毛郡屋代を犯す。（同上）是月、山代の祢塚村、また宇塚村成君寺に拠る山代兵、毛利兵の撃破する所となる。（同上）（中略）三月十一日、山代兵五十余人、毛利兵の撃殺する所となりて余衆皆降り、山代の地毛利氏の有となる。（古文書）十三日中須に戦ふ。（同上）十四日三瀬川に戦ふ。（同上）十五日玖珂に戦ふ。（同上）（中略）四月十八日、毛利兵降松を犯す。（同上）十九日、降松妙見山の営陥る。（同上）（後略）

史料（2）では、史料（1）で、「日未考」としている防州倉掛山城主杉隆泰の敗死を、一一月一四日としている。また、史料（1）で、「日未考」としている防州山代の討伐は、史料（2）では二月八日としている。

毛利軍は、史料（1）・（2）でわかるような状況であったから、これら地下一揆軍に対して、「人え壹人二人充成共打果、家え五間三間つゝも燒立」[3]るという徹底した殲滅作戦をとらざるをえなかった。

このことが、天文二四年（一五五五）に始まる防長両国の侵攻開始後、須々万沼城落城までに一年五ケ月の長年月を必要とした、いま一つの大きな要因であると考えるのである。

三、須々万沼城と地下一揆

弘治二年（一五五六）三月一一日、一応は「山代の地毛利氏の有」[4]となったが、その後も山代の地下一揆軍は抵抗を続け、須々万沼城攻防戦でも大いに毛利軍を悩ました。その状況について、『陰徳記』（巻第三十二）には、次のように記されている。

（史料3）

（前略）山代ノ一揆等神田丹波守・同彦三郎等ヲ大将トシテ二千余騎馳集テ城中へ入モアリ、又後詰ノ勢ニ加モ有ケリ。カヽリケル間須々万表ノ兵城中後詰合テ一万計有ケレ（後略）

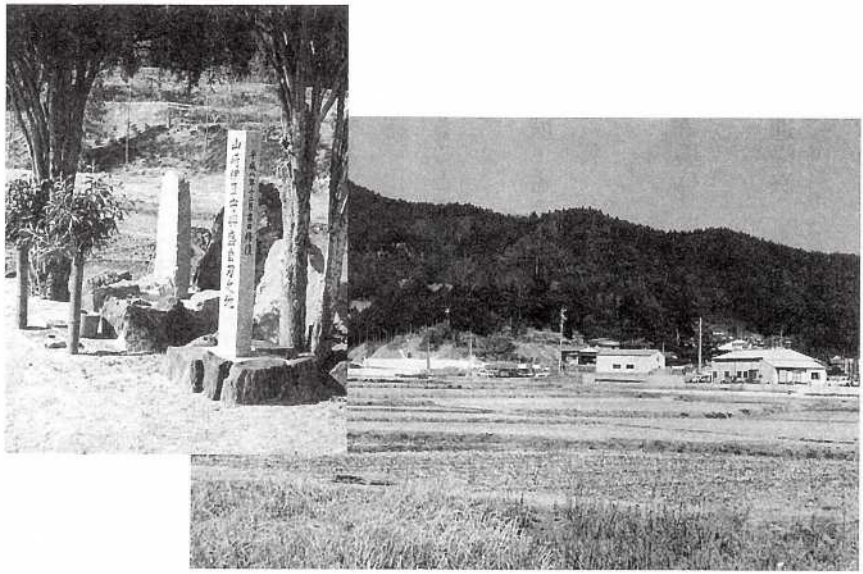
史料（3）でわかるように、須々万沼城の守備軍の構成を考えるとき、山代一揆軍が、その一翼を担っていたことは確実のようである。そこで、このような事実を前提として、須々万沼城守備軍の性格を解明することにより、本稿の考察目的達成の一助とする。

須々万沼城は、要害であったといわれているが、その規模等については、『陰徳記』（巻三十二）には、次のように記されている。

（史料4）

（前略）城ノ体ヲ見レハ、纔ナル城ノ東南へ向タル方コソ少切岸ノ有ケレ、西ト北トノ間ハ山ノ斜ニシテ一飛ニモ飛上ルヘキ有様ナリ。北ト東ノ間ハ是モ山ノ形次第ニ下リ、何ノ節所モ無カリケルニ、逆茂木引、柵結テ所々ニ落シ穴ナト堀ウリケル。寄手ノ先陣城険難ナラス、殊ニ纔一町ノ内外ノ小城ナレハ（後略）

史料（4）によれば、須々万沼城は小さな城砦であったようであり、当時、城主も常駐していなかったようである。このあたりの事情を近藤清石氏も、「沼城もと誰の守る所なりし歟知られず」と述べている。[5]



山崎伊豆守自刃の地　沼城址全景

弘治元年（一五五五）から弘治三年（一五五七）当時、城主不在であったと考えられ、須々万沼城守備軍の番大将として、『温故私記』（巻第七）は、次の諸将を上げている。

（史料5）

一防州都濃郡須々萬沼の要塞には山口より宗徒の侍山崎伊豆守興盛同右京進隆次江良彈正賢宣勝屋右馬允興久此人々番大将として人数三千許にて籠置れけり（後略）

史料（5）によれば、須々万沼城守備軍の番大将は、山崎伊豆守興盛、山崎右京進隆次、江良彈正賢宣、勝屋右馬允興久の諸将であったようである。

史料（5）の内容に照合するものにして、都濃郡誌には、

毛利元就大内氏逆臣陶晴賢を嚴島に破て大内義長を山口に攻めんとするや陶の殘黨遠得山に城砦を構へ沼城と名づけ江良彈正賢宣、山崎伊豆守興盛、其の子右京進隆次、勝屋右馬允興久等を番大将として之

を守り

と記されている。[6]

これらの記述から須々万沼城は、天文二四年（一五五五）に始まる、毛利軍の防長両国侵攻開始に応じて、要害の地である須々万緑山の南麓字肝要の遠徳山に急遽構えられた城砦とも考えられる。

また、毛利軍による防長侵攻時の須々万沼城には、城主が不在であったと考えることは、史料（5）および「都濃郡誌」に見える須々万沼城の各番大将の当時の居城を知ることにより、可能である。

（史料6）

須々万沼城・番大将居城

番大将	大内氏実録[7]（地下由来書）	都濃郡誌[8]
山崎伊豆守興盛	須々万奥村	字和田
山崎右京進隆次	熊毛山城主	殿ケ浴城主
	須々万奥村	字下角
	真光院山城主	殿田城主
江良彈正賢宣	本郷村	字肝要
	遠徳山城主	遠得山城主
勝屋右馬允興久	須々万奥村	字藤谷
	殿浴山城主	藤谷城主

史料（6）から、毛利軍の防長両国侵攻に備えた須々万沼城守備軍の番大将達は、沼城主ではなかったことがわかる。

陶氏の家臣であったこれら諸将は、毛利軍侵攻開始を知るや、岩国から山口への進軍通路でもあり、また、大沢を帯びて要害でもあった須々万沼城に、各居城を打ち捨て結集したものと考えられる。

このような諸将達の行動様式から、須々万沼城番大将達には、物心両面において、地下一揆的な要素が、満ちていたのではなかろうか。

また、沼城には、これら番大将達のもと、山代一揆軍や厳島・折敷畑の戦いに残った陶方の士卒や百姓どもも馳せ集まって籠城しており、地下一揆軍の延長とも考えることができよう。

したがって、須々万沼城合戦においては、地下一揆軍的な合戦ノウハウ、すなわちゲリラ戦的な戦術が展開され、毛利軍を非常に悩ましたと考えられる。

このことが、天文二四年（一五五五）に始まる防長両国への侵攻開始から、須々万沼城落城までに一年五ケ月の長年月を必要とした第三の要因であると考えたい。

四、毛利氏の性格

安芸国の国人領主から戦国大名化への過程にあった毛利氏の性格的特質について、ここでは、家臣団の編成を通して考えることとする。毛利家の家臣団は、その系譜により庶家・譜代・国衆・外様に分けられる。

(1) 庶家～これは、南北朝動乱期に惣領家から分出したものである。

(2) 譜代～譜代は、その系譜により、

a 惣領家および庶家の被官・中間から出たもの

b 小庶家および庶家の分家から出たもの

c 付近の小領主から出たもの

がある。

(3) 国衆～芸備両国において、かっては毛利氏と同じ中世封建的領主であった熊谷・平賀・山内首藤・阿曾沼・天野・吉川・小早川・宍戸・出羽らの諸氏をいう。

(4) 外様～これは主として大内氏旧臣と尼子氏旧臣が、降って毛利氏の家臣となったものである。

毛利氏の譜代は、室町の初期から応仁・文明にかけて形成されたが、毛利氏はこの譜代の創出とその活用には大体成功したといわれる。

しかし、国衆の譜代化には失敗した。国衆は、元就時代以前までは、毛利氏と対等のつきあいをしていたが、毛利氏の勢力伸張とともに実際の婚姻関係か、または、擬制的な兄弟の契約によって同盟関係に入った。

そして、毛利氏と同じ惣領体制をくずすことなく、そのまま独立した姿で毛利氏の旗下に入ったのである。

毛利氏は、国衆と同盟関係をつくることには成功し

たが、かれらを家臣団化することができず、その統制に苦しんだ。国衆が、完全に家臣化したのは、慶長五年の萩打入り以後といわれる。

毛利氏の性格的特質の一つといえるこの国衆連合の不安を示す史料として、系譜の異なる二つの家臣グループとの盟約がある。これは、主従のあいだに分けへだてのないことを示そうとした元就苦心の演出と考えられる。その一つは、御親類衆・御年寄衆・御家人とよばれる毛利宗家譜代の家臣たち一六名との軍規の厳守を誓った起請文である。[9] ついでもう一枚の起請文は、国衆・外様とよばれる阿曾沼・宍戸・天野・平賀・熊谷・出羽など、安芸・石見の豪族に、元就・隆元が入り、元春と隆景が吉川・小早川という国衆の資格で加わり、あわせて一二名が、前の家臣団グループの起請文同様に、輪を囲むようにして名を書きしるした。いわゆる傘連判状である。

（史料7）

申合条〻事

傘型連判状　元就ほか一一名の契状

一　軍勢狼藉之儀、雖堅加制止、更無停止之条、於向後、此申合衆中家人等、少茂　於有狼藉者、則可討果事

一　向後陳払仕間敷候、於背此旨輩者、是又右同前可討果事

一　依在所、狼藉可有不苦儀候、其儀者、以衆儀可免事

八幡大菩薩、厳嶋大明神可有御照覧候、此旨不可有相違候、仍誓文如件

弘治三年十二月二日

元就は、二つの家臣団グループと別々に盟約をしたわけであるが、このことは、毛利氏の家臣団が先にも指摘したように、統一体となっていなかったことを意味する。

しかも、その署名はいわゆる傘連判であった。このような主君と家臣が分けへだてなく輪になるということは、本来の支配者の発想ではない。

また、譜代衆との契状はかろうじて、元就の指示に従って、という形になっているが、国衆とのそれは、「申合」、つまりまったく対等な契約関係であり、そこには、毛利氏の権力の弱体さをみることができる。

このような毛利氏の性格的特質のなかに、防長両国侵攻戦において、須々万沼城攻略までに一年五ケ月の長年月を必要とした、最も根本的と考えられる要因の存在を見だすことができるのである。

おわりに

本稿では、天文二四年（一五五五）一〇月一日に、陶晴賢を倒した毛利軍が、一〇月七日から大内氏領の防長両国の侵攻を開始したが、それ以来須々万沼城を攻略するまでに、一年五ケ月にわたる長年月を必要とした要因について、考察を試みてきた。その結果として、以下の点を指摘した。

(1)　明応～弘治期の毛利氏は、国人領主段階にあった。

この段階における毛利氏には、その軍事力強化を指向する政策の貫徹を妨げている家臣団の領主権力に

対する一種の自主性が存在するという軍事力編成の特質があった。

(2) 防長両国侵攻時に、防州東部で陶方に組した地侍と農民で構成される地下一揆軍による活発な抵抗があった。毛利軍は、ゲリラ戦に悩まされ、徹底した殲滅作戦をとらざるをえなかった。

(3) 須々万沼城守備軍は、その構成内容、性格からして地下一揆軍の延長であった。須々万沼城合戦においては、地下一揆軍的な合戦ノウハウが存在した。

(4) 国人領主から戦国大名化への過程における毛利氏には、国衆連合の不安が存在した。そのため当時の毛利氏の権力は、弱体であった。

さて、本稿では、以上のような雑な考察に終始してしまったが、今後機会があれば、難攻不落であった須々万沼城が、弘治三年（一五五七）二月末日よりわずか四日間の攻撃で、簡単に落城した要因についての考察結果も発表してみたいと思っている。

註

(1) 村田修三「戦国大名毛利氏の権力構造」五三頁（『毛利氏の研究』吉川弘文堂　一九八四年）

(2) 秋山伸隆「戦国大名毛利氏の軍事力の展開」一九六頁（前掲）

(3) 『萩藩閥閲録』　三十二

(4) 『大内氏実録』　巻第二十八

(5) 『大内氏実録』　巻第三十

(6) 『都濃郡誌』　第九章、第五節

(7) 『大内氏実録』　巻第三十

(8) 『都濃郡誌』　第九章、第五節

(9) 大日本古文書『毛利家文書之一』一九三頁
前掲『毛利家文書之二』四三頁